

## 日本語学習と異文化理解をつなぐ遠隔教育の試み

### —院内学級児童と台湾学生の交流を通して—

山本裕一<sup>\*1</sup>, 楊錦昌<sup>\*2</sup>, 林玉惠<sup>\*2</sup>, 謝昀叡<sup>\*3</sup>, 小柳千佳子<sup>\*4</sup>

<sup>\*1</sup>北海道大学情報基盤センター, <sup>\*2</sup>輔仁大学日本語文学系, <sup>\*3</sup>北海道大学高等教育推進機構,

<sup>\*4</sup>札幌市立北辰中学校ひまわり分校

<sup>\*1</sup>Information Initiative Center, Hokkaido University

Email:sierra@iic.hokudai.ac.jp

あらまし：病院内に設置された院内学級は病気の子供達が入院しながら学習する教室であり、学習の遅れを解消することが主な目的である。また個々の病状に応じた入院や治療によって閉鎖的な状況に置かれる子供達にとって、外部との交流は回復への意欲を育む重要な要素となり得る。北大病院院内学級ひまわりでは外界との接触が困難な子供達が容易にコミュニケーションをとるためのツールとして双方向遠隔通信環境による遠隔教育を行っている。総合学習の一環として行う異文化理解授業を昨年に引き続き台湾で日本語を学ぶ学生と協調して行った。本稿ではその概要について報告する。

キーワード：院内学級、異文化交流、遠隔授業、初・中等教育実践

#### 1. はじめに

2012年に策定された国のがん対策推進基本計画において、小児がんは重点課題と位置づけられた。小児がん患者とその家族が安心して適切な医療や支援を受けられる環境整備のため、2013年2月には全国に15の小児がん拠点病院が指定され、北海道では北海道大学病院が地域における中心的役割を担っている。2019年の整備指針見直しでは、AYA世代の患者への医療・支援対応が指定要件に追加された。北大病院には小児・AYA世代がんセンターが設置され、治療に加え、療養中の子どもたちが健康な子どもたちと同じ生活・教育環境で医療や支援を受けられるよう、院内学級や地域学校との連携目指している。

#### 2. 北大病院院内学級ひまわり分校

北大病院院内学級ひまわり分校は札幌市内の小中学校の分校という形式をとり、道内外から治療のため入院している子供たちを毎年、小学生約30名、中学生約20名程度を受け入れている。主な目的は長期・短期入院による学習の遅れを解消することだが、小児がん等の重篤な症状による入院や治療で陥りやすい空間的・心理的な閉鎖的、抑圧的な状況にある療養児の心理的な安定を図ることも重要視されてい

る。そのため、「気持ちの開放を図り、外に開かれた友人との交流を図る」ことは回復への意欲につながるとされている[1]。北大病院院内学級ひまわりでは、テレビ会議やWeb会議システム、SNSなどを活用し、国内外の多様な人々との異文化交流を行ってきた[2, 3]。

#### 3. 複数の院内学級が参加する異文化学習

これまで我々は、総合学習の一環としてアラスカ大学、国立天文台ハワイ観測所、サウジアラビアキングサウド大学、北大北京オフィス、中国東北師範大学、ベトナム、マレーシア、台湾とテレビ会議システムで連携してきた。これは異文化理解・コミュニケーション、各教科の発展的補完を目的とした総合的な取り組みであり、各教科の今後の学習への動機付けを図る授業として実施してきた。しかし、海外からの遠隔授業は講師の都合などにより定期的な実施が難しく、実施できた場合でも病気療養児の容態によって参加できる児童が限られ、貴重な機会を十分に活かさないこともあった。従来は主にTV会議システムを利用してきたが、コロナ禍で普及したZoomを導入したことで、大阪学院院内学級、関西医科大学院内学級に加え、札幌市立山の手支援学

校、新潟県立柏崎支援学校、刀根山支援学校訪問部（ベッドサイド）など、都合の合う施設にも参加してもらうことで、児童の不参加による授業中止を回避している。これまで機材や回線の問題で参加困難だった施設も加わることで、ある程度年間計画を立てることが可能になった。今後は各教室で行われる異文化学習などで共有できる教材や活動を増やしていきたいと考えている[4, 5]。

#### 4. 台湾輔仁大学日本語クラスによる授業

2024年6月に実施された第2回遠隔授業には、輔仁大学の「進階日語(上級日本語)」履修生である2年生33名が参加し、日本側からは北大病院院内学級と新潟県立柏崎特別支援学校の児童生徒、小中学生計6名が参加した。第1回の授業における課題、具体的には発表学生によるZoomコンテンツ共有時のトラブルや質疑応答の時間の不足を踏まえ、授業構成を大幅に見直した。具体的には、発表に用いる動画を事前にホストである北大側に提出してもらい、日本側の教室で一括して再生し、Zoomの画面共有を北大側がコントロールする方式に変更した。これにより、不慣れな学生の操作ミスに影響されることなく、授業を円滑に進めることができた。6つのグループが作成した4,5分の動画には字幕が付されており、視覚的にも配慮された内容であった。動画再生後には、台湾側の学生がZoomを通じて簡単な挨拶と補足説明を行い、日本側の小中学生と教員が質問をする形で質疑応答が行われた。ここまですべての児童生徒の授業時間である45分間で実施した。第1回の遠隔授業ではプログラムはここまでで終了し、Zoomの画面共有の不便なども重なり、交流時間の不足が課題となっていた。今回は前半の視聴パートに45分を充てた後、台湾側の授業時間の残りの45分間を学生と日本側の教員による質疑応答や議論の時間とした。日本側の児童生徒は発表パートのみに参加し、その後、児童生徒からの感想や質問をフィードバックとしてまとめ、台湾側と共有した。授業の録画は、参加できなかった児童生徒のために後日YouTubeで限定公開し、視聴できるようにした。授業後に実施された台湾側の学生へのアンケート(5段階評価、n=21)の結果では、前年(2023年)と比較して全ての項目でスコアが上昇した。「日本語学習への意欲」(4.2)、「チームワーク」(4.5)、

「国際交流への関心」(4.4)、「病気の児童への支援への関心」(4.5)などの項目で高い評価が得られた。自由記述からは、「字幕や原稿作成を通して日本語の表現力が向上した」「動画制作が楽しく、協働学習に役立った」「また日本の児童と交流したい」といった意見が見られた。

#### 5. 今後の展望

今回の遠隔授業では、授業設計を工夫したことで前回の課題はかなり解消され、有意義な国際協働学習が実現した。今後は、他の院内学級や自宅療養中の児童生徒との連携をさらに進め、より多様な交流の形態を検討していきたい。加えて、参加児童の質問を支援する仕組みを導入し、参加者全員がより積極的に発言・交流できる体制を整えることも重要である。

#### 参考文献

1. 横山強「特別支援学校の分教室におけるICT等の活用実践例について」『特別支援教育』, No. 58, pp. 28-33 (2015)
2. 山本裕一・西堀ゆり・吉田徹『掲示板型ツール「コラボード」と「コラボード広場」による院内学級での協調学習—院内学級での遠隔協調学習におけるシステム構築—』教育システム情報学会第29回全国大会講演論文集, pp. 55-56 (2004)
3. 西堀ゆり「院内学級と北京を結んだ遠隔教育—テレビ会議システムによる異文化理解教育の試み—」教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集, pp. 404-405 (2011)
4. 山本裕一・井口晶裕・島田貴弘・小柳千佳子「小児病棟への学びのための高速ネットワークの導入について」大学ICT推進協議会2020年度年次大会講演論文集, FB1-4, pp. 296-297 (2020)
5. 山本裕一・佐藤修・小柳千佳子・濱田和・佐藤聖子・西牧謙吾「TV会議システム、モバイル機器を利用した複数の院内学級による台湾に関する異文化理解授業」教育システム情報学会第44回全国大会講演論文集, F6-2, pp. 437-438 (2019)
6. 山本裕一・楊錦昌・謝昀叡・小柳千佳子「院内学級における台湾輔仁大学で日本語を学ぶ学生による異文化理解授業」教育システム情報学会第49回全国大会講演論文集, pp. 285-286 (2024)